《巻頭言》

大学教育の活力としての研究

統括学系長
星野　珙二

福島大学は教育重視の大学であります。そのことに異論はなく、むしろ賛成です。私自身も教鞭をとるものとして、明日の講義はどうしようか、いつも学生の顔を思い浮かべながら教えることの悩みを抱えてきたような気がします。長い教育経験にもかかわらず、手応えのあった講義の数は相対的に少なく、教育は一方通行ではなく相手との関係性の上で成り立つものであることなど、そのつど奥の深いものであることを思い知らされてきました。学生に対して大学教育でいかに付加価値をつけるか、これはこれで大学を挙げて取り組むべき大きな課題であることに間違いはありません。本学の＜教え・教わる＞から＜自ら学びとる＞への転換は挑戦すべき価値ある最大のテーマと思います。

他方、研究者からみると、自分が取り組んできた研究にはさまざまな思い入れがあるもので、そこにはまさに興味関心の個人史が詰まっているといっても過言ではないでしょう。思わぬ発見があって胸踊るような醍醐味を味わう機会にめぐり合えることもあれば、仮説が証明されずに大きく意気消沈することもあります。研究には厳しさがあり、その先に喜びもあります。研究の成果物には近寄りがたいものを感じたりするものですが、研究のプロセスには生き物のような息遣いがあり、研究の当事者にしか分からないようなドラマが潜んでいたりするものです。こうした研究のプロセスにおけるヴィヴィッドな精神はかけがえのないものであり、大いに大切にされるべきでものであると思います。

大学における講義科目は全体の学問体系にもとづいて取捨選択されるものであり、講義自体も体系性を重んじて組み立てられますが、それは決して体系的に整理された知識だけを教え込むことではありません。上で述べたような研究の面白さ、研究の生きている姿とともに学問が語られてこそ大学教育は活力を維持し続けるものと考えます。そして、このことが、学生の主体的学習を育む方向へ作用することは間違いないと思います。その意味において、本学の教育重視を貫くためには研究活動も重要であり、研究と教育が決して二者択一的にあるのでは無く、両者の相乗効果を高める努力をしていくことが肝要ではないかと考えます。

「福島大学研究年報」はこれで３号目の発行となります。本学構成員に研究活動に注目してもらうためのひとつの契機となり、本学の研究活動がさらに活発になることを願うものであります。編集には、研究推進委員会の片野一（文学・芸術学系長)、小島彰（経済学系長)、安田（社会・歴史学系長)、佐野敦至（外国語・外国文化学系長)、小山純正（生命・環境学系長)、星野珙二（数理・情報学系長）の各委員が携わり、また、研究支援グループから多大な事務的支援をいただいたことを明記させていただきます。